

## 第18回 日本SPF豚研究会 講演要旨

於 平成20年6月27日 東京大学山上会館

平成19(2007)年度 日本SPF豚協会年次報告

日本SPF豚協会 藤田 世秀

平成20年3月末現在のSPF豚認定農場は185農場(内GGP、GP農場19、子豚育成専門農場2、肥育専門農場15)である。昨年より、一貫生産・繁殖専門農場が微減したが、全体では3農場増加した。飼養母豚数は、一貫生産・繁殖専門農場の微減を受けて、71,726頭と1,302頭(1.8%)減少した。平成19年度後半のCM農場防疫設備・管理基準の見直し強化が、認定見送り農場に影響したと考えられる。

生産成績をみると、一貫生産農場では農場回転数、1母豚あたり年間肉豚出荷頭数、出荷肉豚1頭あたりA分類薬品費の改善が見られた。しかし、農場飼料要求率は悪化した。繁殖専門農場では1母豚あたり年間分娩回数は昨年と変わらないが、1母豚あたり年間離乳子豚頭数、1母豚あたり年間出荷子豚頭数は若干改善された。しかし、出荷子豚1頭あたりA分類薬品費は、昨年より約10円増加している。肥育専門農場では肉豚出荷率、出荷肉豚1頭あたりA分類薬品費が改善された。しかし、飼料要求率は7%悪化した。

## 養豚生産におけるICタグ、オートソーティングおよびトレーサビリティの連動

富士通CIT株式会社 岡崎 幸嗣

近年の養豚産業に関わる状況は、飼料高騰による生産費アップと消費者の食の安心・安全意識の向上の中で、中小養豚農家の廃業と大規模企業養豚が拡大し、産地間・企業間競争が激化しています。こうした中で、生産性の向上と商品のブランド化による販売力の強化が求められています。今回、有限会社十和田湖高原ファーム様において、国内初のICタグとオートソーティングシステム(自動体重測定器)さらにトレーサビリティ(履歴管理システム)を組み合わせた新しい複合システムの構築に取り組みましたのでご紹介します。本システムを活用することにより、豚個別の肥育状況の収集と管理が行なえ、繁殖から肥育における現状課題の抽出と改善策に向けた取り組みや経営資産管理が容易にできるものと期待しています。さらに消費者の安心安全志向に対応する国内第一号認定のJAS規格対応にも活用されており、養豚産業における大きな支援ツールにすべく取り組んでいます。

## オーエスキー病防疫対策要領の改正について

農林水産省消費・安全局動物衛生課 荻窪 恭明

オーエスキー病については、平成3年度から「オーエスキー病防疫対策要領」に基づき、発生状況等に応じ、地域区分を設け、清浄化対策を進めてきました。これまでの取組の結果、本病の浸潤の拡大は阻止してきているものの、浸潤地域の清浄化は、一部に止まっている状況にあることから、本病の清浄化に向けた更なる対策を図るため、防疫技術検討会を設置し、本病対策のあり方について検討を行い、本要領を改正することとしました。具体的には、生産者間のコンセンサスを得つつ地域一体となった防疫対策措置を講じるための清浄化段階に応じた新たな地域区分の設定、各清浄化段階で行う清浄性確認のための検査の実施とともに、民間獣医師や民間検査機関等を活用した効率的な検査体制の整備、民間獣医師等を活用した効果的なワクチン接種体制の整備を図ることとしています。

昨年4月には、長年の取組の結果、豚コレラが清浄化されました。これに続き、本年度からADの早期の清浄化に向けた防疫対応を推進していくこととしています。

## 家畜改良センター茨城牧場におけるAD清浄化事例

(独)家畜改良センター茨城牧場 齊藤 政宏

家畜改良センター茨城牧場は、平成17年にオーエスキー病(AD)の野外抗体を検出し、AD侵入が確認された。D、W、L、Y、梅山豚、メキシカンヘアレス等の貴重な育種資源を飼育しているため、牧場全体のオールアウトによる清浄化を行うことは現実的に不可能であった。このため、動物衛生研究所、日本SPF豚研究会等の外部有識者の助言を受け、ワクチンを使用してウイルスの活動を抑えながらの清浄な後代作出、段階的なオールアウト、豚舎の洗浄・消毒、厳重なモニタリング、作業動線の変更、「おとり豚」による清浄性確認等からなる清浄化プログラムを策定し、取り組んだ。結果、必要な後継豚群が確保され、平成18年8月にすべての野外感染豚の淘汰を完了し、平成19年10月、野外感染豚の排除完了から1年以上新たな野外感染豚が認められていないこと、「おとり豚」による厳重な清浄性確認検査で感染が認められないこと等から、清浄化が確認された。一連の取り組みについて、GGP・GP農場において貴重な育種資源を失わずにAD清浄化に成功した事例として紹介する。

## SPF豚認定農場におけるAD清浄化例

(株)サンエスブリーディング 名越 仁宣

SPF豚農場認定規則において、GGP農場およびGP農場についてはADワクチンの使用を禁じている。CM農場についてはADワクチンの使用を認めているが、年二回のAD抗体検査(清浄地域は年1回)において野外ウイルス抗体が確認された場合、場内豚全頭を対象にしたワクチネーションプログラムと年4回(3ヶ月毎)の抗体検査で状況を把握し、清浄化に向けて取り組むこととしている。これまで、認定農場のうち野外AD抗体が確認されたのは延べ15農場ある。そのうち現在までに清浄化されたのは7農場。この場では、清浄化に成功した農場と未だ推進中の農場の違いなどを取り上げながら、より良いAD清浄化対策を考察する。

/以上